

常陸の古代瓦

黒澤 彰哉

平成6年に茨城県立歴史館がまとめた県内古代瓦の確認調査では、県内28市町村(旧)から116遺跡の古代瓦出土地が確認できた。このうち、現段階で寺院跡と考えられるものは25遺跡、瓦窯跡は15遺跡存在する。これらの遺跡は、各郡の官衙遺跡や寺院跡、または瓦窯跡であるが、台渡里廃寺跡のように、寺院跡かどうか意見が分かれていたものが、その後の調査で明らかになったものもある。

本論では、前の県内古代瓦の調査に新たに明らかにされた内容を加え、各郡ごとの古代瓦の様相を概観してみたい。なお、各郡の()内の数字は「和名抄」による郷の数である。

○ 多珂郡(8郷)

北茨城市大津廃寺跡では、昭和56年に行われた調査により、長辺 17.5m、短辺 16.0mの版築基壇が確認されている。軒丸瓦は素縁複弁8葉蓮花文(1101)と、交叉文縁複弁6葉蓮花文(1102)の2種類が確認されているが、主体となるのは 1102 で、福島県南部から県北に分布する特徴をもつ。軒平瓦は段頸の三重弧文(1201)で、凸面を縄叩きとする。無段丸瓦、桶巻き作り平瓦が確認されているが種類が少なく、創建後の修復はなかったと考えられている。1101 は群馬県山王廃寺の素縁複弁7葉蓮花文軒丸瓦と類似する。時期は山王廃寺(放光寺)の年代から、7世紀第4四半期と考えられる。

このほか、同市中郷町の馬田遺跡から鋸歯文縁連珠文軒丸瓦(1150)と、唐草文軒平瓦(1260)が出土している。遺跡の性格は不明であるが、軒先瓦をみると両者の組み合わせしかなく、修復などは行われなかったようである。軒平瓦の唐草文の特徴から平安時代のもものと想われる。

○ 久慈郡(21郷)

栗谷廃寺跡(長者屋敷遺跡)は、「久寺」の墨書土器が出土しており、久慈郡の郡名寺院であることが明らかである。さらに、近年では鬼面文鬼瓦や幾何学文様センなど多くの資料が増加している。県教育財団によって確認された溝をもとに考えると、南北3町、東西2町の寺院地が想定でき、瓦の分布はほぼこの中におさまる。長者屋敷遺跡の名称のとおり、近くに炭化米が出土する場所があることから、正倉が近接して存在する可能性が考えられる。

現在のところ確認されているのは、素縁単弁8葉蓮花文(2101・2104)、素縁複弁6葉蓮花文(2102)、素縁単弁11葉蓮花文(2103)、素縁単弁8葉(大小)蓮花文(2105)、素縁単弁8葉蓮花文(2106)軒丸瓦と、段頸の三重弧文(2201)軒平瓦、無段頸の素文(2230)軒平瓦で、このほかに鬼面文鬼瓦や幾何学文様センがある。

軒丸瓦では、楔形間弁に区画された中に花卉を置く 2103 と 2104 が同じ文様系列にあり、大小の花卉4葉を交互に並べた 2105 と 2101 が同系列に属する。小花弁の頂部につく唐草文の有無から判断すると、2105 から 2101 の変化が考えられる。このほか、2102 は大津廃寺 1102 の流れを受けたもので、2106 は瓦当部の特徴や間弁の形態から台渡里廃寺 3112 軒丸瓦に類似している。鬼面文鬼瓦は外縁から面部が突出しない平板な形態で、円頭方形を呈し、鬼板の裏面上部周縁には接合痕をもつ。幾何学文様センは、長方形の四辺の側縁部に唐草文・菱形文・三角文などの異なる文様パターンが見られるもので、文様が5個あることから少なくとも2つの文様センが存在するものと思われる。

このほか、平瓦に興味深い技法が存在する。これは凹面に縄目痕をもつもので、桶巻き作りの後に分割された平瓦を縄目の敷物を敷いた(もしくは縄を巻き付けた)成形台にのせ、再度凸面叩きを行うというものがある。その結果、凸面には桶巻き作りの際の縄叩きと、成形台の叩きの斜格子叩きが重なって認められることになる。このような凹面縄目痕の平瓦は類例が無く、伝由良川河底出土の高句麗系軒丸瓦裏面に僅かに見られたほかは、北朝鮮の土城跡など高句麗の遺跡に認められるのみである。

本廃寺の瓦には高句麗の影響が認められるが、その背景には『日本書紀』の持統天皇元年(687)三月に高麗の56人が常陸国に配されたことと関連があるものと思われる。

瓦窯跡では常陸大宮市鷹巣瓦窯跡で2基の窯跡が発見されている。

○ 那賀郡(22郷)

那賀郡内では、台渡里廃寺跡(長者山地区・観音堂山地区・南方地区)、田谷廃寺跡、木葉下窯跡、薬師平遺跡、山田窯跡、原の寺窯跡、下入野遺跡、長福寺遺跡、中台遺跡、有賀遺跡など、多数の瓦出土地が存在する。台渡里廃寺跡では、今回の調査により観音堂山地区が郡名寺院跡、長者山地区が正倉跡であることが明らかとなった。軒先瓦は多種にわたって確認されており、その分析は緒についたばかりである。ここでは、今後の研究をまつことにして、台渡里廃寺周辺の様相を見ることにする。

田谷廃寺は、伊東重敏氏によって瓦出土地点の測量が行われ、文字瓦が紹介されている。文字瓦は両面糸切り痕の平瓦や有段丸瓦に刻まれており、文字には「岡田」、「千」、「八」、「田加」、「丈」、「人」、「大」などがあり、大部分が金釘流の書体となっている。田谷廃寺の瓦に最も近いのは原の寺瓦窯跡出土のもので、原の寺窯跡の場所が古代の岡田郷に属する事を考えると、田谷廃寺の瓦は原の寺瓦窯跡から供給されたものであることが考えられる。

木葉下窯跡は、須恵器を製作した大遺跡群で、須恵窯の焼台に瓦が用いられていることから、窯跡群内に瓦窯跡が含まれる可能性が考えられている。薬師平遺跡はこの木葉下窯跡群の北西に位置している遺跡で、高取山の山麓にあたる場所にある。遺跡内には土壇状の高まりや礎石があるとされており、長縄叩き平瓦などが出土している。

有賀遺跡は奈良・平安時代の集落遺跡で、遺跡内から小金銅仏と格子叩き平瓦、それに須恵器杯が出土している。調査されていないので出土地の性格が不明であるが、格子叩き平瓦と金銅仏が出土していることから、仏堂的な施設が存在した可能性が考えられる。

中台遺跡も平安時代の集落遺跡で、国分寺と同範の軒丸瓦(7109)が出土している。

○ 香島郡(18郷)

正倉跡である神野向遺跡から素縁7葉蓮花文(4103)と格子叩き平瓦が出土している。4103 は中房区を大きくとり花卉が平坦となったもので、県内では類例のない瓦当文様である。瓦は8世紀前半の建物の柱抜き取り痕から出土している。

神宮寺跡は鹿嶋市鉢形にあった寺院跡で、天平勝宝元年(749)に僧満願により鹿島神宮の神宮寺として創建されたものである。神宮寺跡からは、センを敷き詰めた基壇が発見されているが、屋瓦については確認されていない。

○ 行方郡(17郷)

行方市井上にある井上神社の東方に井上廃寺跡がある。近くには井上長者屋敷遺跡もあり、官衙である可能性が指摘されている。井上廃寺跡は道路拡張工事に際して行われた調査により北側溝が確認され、寺院跡であることはほぼ間違いないようである。出土している軒丸瓦は、素縁単弁6葉蓮花文(4101・4102)、素縁単弁18葉蓮花文(4105)である。4101と4102は花卉の間に細い間弁を入れたもので、4102は間弁や花卉線が太くなり後出の要素をもつ。4105は国分寺7105と同範で、行方郡内には手賀遺跡からも同じものが出土している。なお、4101は県内でも数少ない1本作り技法によるもので、瓦当裏面に布目痕をもつ。

軒平瓦は重弧文(4201)と素文(4230)がある。重弧文は平瓦凸面に格子叩きをもつが、素文も同じような格子叩きもち、創建期に用いられたことが明らかである。この格子叩きは平瓦の主体となるもので、格子の粗密により数種の叩き具の違いはあるが桶巻き作りによる。ただし、素文の軒部は平瓦を折り返して段顎にしており、他に例のないものである。平瓦には長縄叩きのものが見られるが、これは国分寺7105の導入に際して用いられたものである。

手賀遺跡は行方市手賀地区の台地上にある遺跡で、遺跡の性格は不明である。ここからは軒丸瓦(4105)と軒平瓦(4260)が出土しているが、これは全て国分寺7105軒丸瓦、7260Ⅲ軒平瓦と同範である。同様に平瓦も一枚作りによる長縄叩きで、国分寺と同じものである。

鉢田市塔ヶ崎遺跡は台地斜面にある遺跡で、立地から瓦窯跡と推定されている遺跡である。ここからは、香島郡神野向遺跡の4103と同文の4104が出土しているほか、井上廃寺の平瓦と同じものが出土している。位置関係から井上廃寺に関連した瓦窯跡と考えられる。神野向遺跡の軒丸瓦がこの遺跡から出土しているのは、4103が4101・4102の系譜によるものからなのであろう。つまり、行方郡・香島郡に共通して分布することが推測される。

○ 茨城郡(18郷)

郡内で瓦が出土するのは、茨城廃寺跡、下佐谷廃寺跡、常陸国分寺跡、同尼寺跡、国衙跡、西寺廃寺跡、山王廃寺跡、上山廃寺跡、高倉廃寺跡、寺畑遺跡、鹿の子C遺跡、一丁田瓦窯跡、関戸瓦窯跡、松山瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、風返瓦窯跡などである。

このうち国分寺以前のものは、寺院跡では茨城廃寺と下佐谷廃寺、瓦窯跡では一丁田瓦窯跡と関戸瓦窯跡である。茨城廃寺については調査により金堂・塔・講堂跡が確認され、法隆寺式伽藍配置をとることが明らかとなっている。軒丸瓦は素縁単弁8葉蓮花文(7101)とその小型化した7102、結城廃寺系の鋸歯文縁単弁16葉蓮花文(7103)、国分寺の素縁複弁8葉蓮花文(7104a)、素縁単弁18葉蓮花文(7105)、同16葉蓮花文(7106)があり、軒平瓦では重弧文(7201)、素文(7230)、均整唐草文(7260 I)がある。このうち、国分寺系軒瓦の登場は、茨城郡内にあった造瓦組織が完全に国分寺造瓦所に組み込まれたことを物語っており、前時代の瓦当文様や技法は全て郡内から姿を消している。これらを製作したのは一丁田・関戸瓦窯跡のある上佐谷瓦窯跡群である。特に一丁田窯跡は須恵器窯と瓦窯が並列して構築されており、須恵器杯の年代から8世紀以前に操業されたと考えられる。この地からは格子叩き平瓦や無段丸瓦とともに7102の簡便化したものが出土しており、このことから、7101は7世紀第4四半期に遡ることが考えられる。なお、関戸瓦窯跡からは、桶巻き作りで短縄叩きの平瓦が出土している。これは、下佐谷廃寺跡の内容と極めて似ており、近距離にあることを考えれば、下佐谷廃寺に供給した瓦窯跡であることが明らかである。同じ内容のものが茨城廃寺跡にも認められるので、関戸瓦窯跡から茨城廃寺跡にも供給されたと思われる。

国分寺系の軒瓦が出土しているのは、常陸国分寺跡、同尼寺跡、国衙跡、西寺廃寺跡、上山廃寺跡、高倉廃寺跡、鹿の子C遺跡、松山瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、風返瓦窯跡である。このうち、軒丸瓦の最古形式(7104a)が出土しているのは国衙跡と茨城廃寺跡で、国分寺・同尼寺の創建瓦は7104bから開始する。もちろんこれは、7104aの筈が摩滅する過程で7104bとなったものであり、国分寺の創建に際し多量に使用されたために7104bとなったものである。その後、使用頻度によって7104cとなり、最終的には7104gまでの段階を踏むことになる。このことは、7104aがもたらされた時、最初に国分寺に先行して国衙の瓦葺化が進められ、同様に茨城廃寺の修復が7104aによって行われたことを示す。

西寺廃寺跡、上山廃寺跡、高倉廃寺跡は地形から山岳寺院跡と推測されるものである。西寺廃寺跡は岩間町館岸山の山麓にある寺院跡で、山林には礎石の一部が存在する。ここからは国分寺7109軒丸瓦と7264軒平瓦が出土しており、両者の組合せを示している。この組合せは、国分寺塔跡のガラム堂からも同じように出土しており、ほぼ間違いはない。上山廃寺跡は石岡市(旧八郷町)の小屋の山中にある遺跡で、山林の中には礎石と思われる石が残っている。ここからは国分寺7105軒丸瓦が出土していることから、山岳寺院のひとつと推測される。高倉廃寺も、山林中から7260 I 軒平瓦と三彩陶器片、須恵器などが発見されてる。三彩片の存在などから、国分寺に関連した性格が考えられる。鹿の子C遺跡は国衙工房として操業された場所で、製鉄関連遺構や長屋状建物跡、それに官衙的な建物群からなる遺跡である。この地からも7104b軒丸瓦や7105軒丸瓦、7260軒平瓦が出土している。これらの瓦は、住居内の竈構築材として再利用されているものであるが、瓦の年代を決定する貴重な資料を伴うことが多い。これから、7104bは8世紀中頃に、7105は9世紀第1四半期に考えられる。鹿の子C遺跡から出土した瓦の意味するものは、この時期国分寺で造作が行われていたということである。つまり、鹿の子C遺跡の性格を蝦夷戦争による補給地と限定せず、国内の大事業である国分寺造営、それと弘仁9年(818)の大地震による修復といった面をも考慮すべきであると思われる。

松山瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、風返瓦窯跡は全て国分寺関連の瓦窯である。このうち、松山瓦窯跡、柏崎瓦窯跡、瓦塚瓦窯跡の調査が行われている。

○ 筑波郡(9郷)

郡内には、中台廃寺跡、平沢官衙跡、下大島遺跡、東城寺、筑波山廃寺跡が存在する。調査で遺跡の性格が明らかになったのは筑波郡正倉である平沢官衙跡であるが、中台廃寺は塔の露盤石の存在から寺院跡であることは確実であり、東城寺・筑波山廃寺跡は地形から山岳寺院と考えられる。

平沢官衙跡の出土瓦は量が少なく、瓦当の全体が分かるものは見られない。軒瓦では、新治廃寺5104b軒丸瓦と同筈のものが1点(大溝)、新治廃寺5260軒平瓦の簡便化したものが整地層から出土している。平沢地区からは、結城廃寺系の鋸歯文縁単弁16葉蓮花文(8107)が出土しているが、これが平沢官衙跡からの出土であれば新治廃寺の軒瓦が入る前に、結城系の軒瓦が入っていたことになる。

中台廃寺からは、素縁単弁8葉蓮花文(8102)、鋸歯文縁単弁16葉蓮花文(8107・8109)、素縁単弁9葉蓮花文(8111)、素縁単弁8葉蓮花文(8112・8113)などが出土している。この中の8102は茨城廃寺7101軒丸瓦と同文で、8102の方がやや面径が小さく、花卉と中房の間に顎を入れる違いがある。この8102は筑波系軒丸瓦として長く郡内に伝えられ、下大島遺跡の素縁単弁7葉蓮花文(8103・8104)、東城寺の素縁単弁8葉蓮花文(8105)となって9世紀前半まで変遷していく。特に、8104軒丸瓦は河内郡の九重東岡廃寺の修復瓦となって郡をこえた広がりを見せている。軒平瓦は良好な資料が少なく、現時点で多くを語ることはできないが、「中村盛吉拓影集」には国分寺7260 I 軒平瓦と、新治廃寺5260軒平瓦が紹介されており、平

沢官衙で 5260 軒平瓦の簡便化したものが出土したことを裏付けている。また、中台遺跡からは連珠文軒平瓦(8260)が出土しており、下大島遺跡の 8281・8282 軒平瓦のように、筑波郡内には連珠文が 8103 と対応して広がるようである。

東城寺は平安時代に最仙によって開かれた山岳寺院である。この地からは、保安3年(1122)、天治元年(1124)銘の銅製経筒が出土しており、東城寺経塚として著名である。ここから出土した軒瓦は、先にも述べたように筑波系 8105 軒丸瓦と、国分寺 7260 軒平瓦の最終段階のもので、両者は組み合っているものと思われる。

○信太郡(14郷)

郡内では、阿見町追原遺跡、稲敷市下君山廃寺跡、同塔の前廃寺から瓦が確認されているが、3遺跡とも近くに官衙推定地が無い。下君山廃寺跡は、遺跡内に石造露盤があることから寺院跡であることは確実である。塔の前遺跡も基壇状の高まりが現状で確認できることから、寺院跡である可能性が高い。

追原遺跡からは、花卉の膨らみが大きい単弁蓮花文(9103)が出土しているが、小片の為全体の様子は不明である。軒平瓦は三重弧文(9203)が出土している。平瓦は桶巻き作りで短縄叩きのものが確認されている。

下君山廃寺からは、三重弧文軒平瓦(9202)と、国分寺系軒丸瓦(7104 か)、国分寺系軒平瓦(7260 か)が出土している。平瓦では、格子叩き、短縄叩き、長縄叩きが確認できた。長縄叩きのものは国分寺以後のものであり、国分寺系軒丸瓦・軒平瓦と同じに伝えられたものである。全体に瓦当文様の分かるものが見られず、内容については不明な部分が多いが、石造露盤や三重弧文軒平瓦の存在から8世紀前半以前の創建であることは確実である。

塔の前廃寺からは、鋸歯文縁複弁8葉蓮花文軒丸瓦(9101・9102)が出土している。鋸歯文は突線で中房には1+8の蓮子が認められる。軒平瓦は三重弧文(9201)であるが、瓦当部が薄く段顎にはならず、凸面には平行叩きや山形文叩きが行われている。平瓦には格子叩きと短縄叩きが、丸瓦には有段のものが確認されている。

○河内郡(7郷)

調査により河内郡正倉跡、郡庁跡、寺院跡が近接して所在するのが確認されている。瓦が出土しているのは九重東岡廃寺の基壇建物跡周辺で、結城廃寺系の鋸歯文縁単弁16葉蓮花文軒丸瓦(8106・8107)、同系列で簡便化した素縁単弁14葉蓮花文軒丸瓦(8108)、筑波系の素縁単弁7葉蓮花文軒丸瓦(8104)が出土している。軒平瓦では三重弧文(8201)、四重弧文(8203)、下野薬師寺系の唐草文(8260・8261)、筑波系の連珠文(8283)が出土している。

なお、下野薬師寺系唐草文軒平瓦の凸面叩きには格子叩きと縄叩きの両方が存在しており、平瓦にも両者が認められた。

○新治郡(12郷)

郡内の瓦出土地には、新治廃寺跡、新治郡衙跡、上野原瓦窯跡、妙法寺遺跡、本郷瓦窯跡、久地楽長町瓦窯跡、薬師台瓦窯跡、小栗寺山遺跡、横塚古堂遺跡などがある。新治廃寺跡は高井悌三郎氏によって調査された寺院跡で、東西塔を金堂の左右に置く新治廃寺式伽藍の寺院として著名である。出土した軒丸瓦は結城廃寺の鋸歯文縁複弁8葉蓮花文(0102)と同類であるが、鋸歯文の数は異なる。新治廃寺の軒丸瓦には、鋸歯文縁複弁8葉蓮花文(5101・5102・5103・5104)、鋸歯文縁単弁16葉蓮花文(5105)、唐草文縁単弁12葉蓮花文(5106)、国分寺系 5107 軒丸瓦などがある。このうち、5101 から 5104 までは中房区を突起させる 5101 から圏線区画の 5103 に、次いで花卉を変形させた 5104 と変遷する。この後、複弁8葉が単弁化したのが 5105 で、遅れて唐草文縁 5106 や国分寺系 5107 が登場する。

軒平瓦には、格子文(5250・5251)、素文(5230)、重弧文(5201・5202・5203・5204・5205)、唐草文(5260・5261・5262・5263・5264)がある。格子文、素文、重弧文は全て段顎で、広義の創建瓦に属するものである。唐草文は常陸国分寺の均整唐草文の影響を受けており、中心飾りを除いた左右に展開する唐草が極めて酷似する。この唐草文軒平瓦は栃木県にも広がりを見せており、独特な分布圏をもつ。軒瓦の組合せは、平行叩きの存在から 5101 と 5201 が、縄叩きの共通性から 5105 と 5230 が、また薬師台瓦窯における供伴から 5104 と 5260 が組むようである。なお、新治廃寺の文字瓦は長縄叩き平瓦になってから登場する。

横塚古堂遺跡は、小貝川流域の微高地に広がる複合遺跡で、地形から瓦窯跡とは考えられない遺跡である。新治廃寺と同じ平瓦が出土しているほか、遺跡内の薬師堂には平安時代の小金銅仏が祀られている。伽藍をもたない小規模な寺院の存在も考えられる。

○真壁郡(7郷)

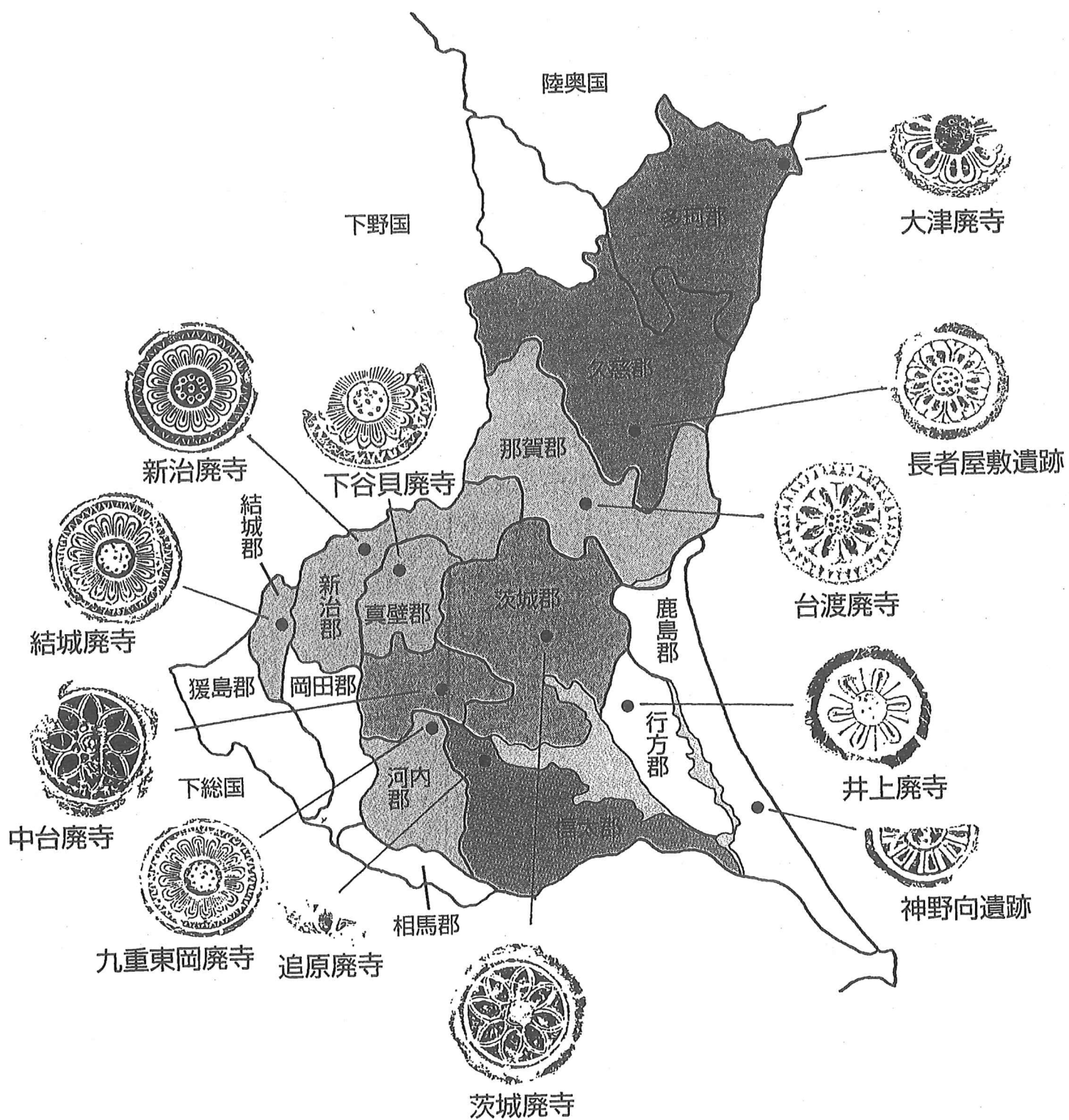
郡内には、新治廃寺と同じ内容の丸瓦と平瓦が出土した御門遺跡、加波山の山麓で桶巻き作り平瓦を出土させた作佐部廃寺、石造露盤をもち金堂・塔・講堂の伽藍をもつ山岳寺院の山尾権現山廃寺、新治廃寺と同じ内容の瓦をもつ下谷貝廃寺、源法寺廃寺などがある。下谷貝廃寺からは、軒丸瓦で素縁単弁 10 葉蓮花文(6101)、鋸歯文縁複弁 8 葉蓮花文(6102)、鋸歯文縁単弁 16 葉蓮花文(6103・6104・6105)が、軒平瓦では均整唐草文(6260)が見られる。基本的に新治廃寺と同じ変化を遂げているが、平行叩きが軒丸瓦や軒平瓦に顕著に認められるという特徴をもつ。

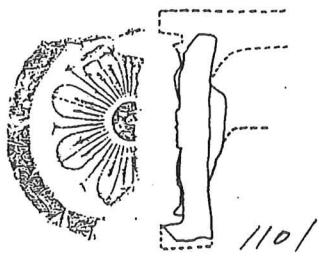
○結城郡(5郷)

瓦の出土する遺跡は、郡名寺院である結城廃寺とその瓦窯跡である八幡瓦窯跡である。結城廃寺跡は、調査により法起寺式伽藍配置をとることが明らかにされており、塔跡の掘り込み地業の中から心礎が確認されている。

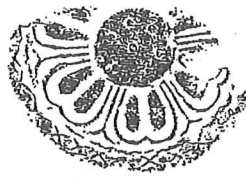
軒丸瓦には、鋸歯文縁単弁 10 葉蓮花文(0101)、鋸歯文縁複弁 8 葉蓮花文(0102)、鋸歯文縁単弁 16 葉蓮花文(0103・0104)がある。この中の 0102 軒丸瓦は新治廃寺 5101 と酷似しているが、鋸歯文の数の違いなど同範ではない。新治廃寺 5101 と結城廃寺 0101 は並列関係にあると見るべきで、両者は下野薬師寺 101A などの影響を受けて共に成立したものと思われる。両者を前後関係とせず並列と見るのは、新治廃寺・結城廃寺とも独自に別々の形式を生み出していることから判断した。つまり、結城廃寺では複弁 8 葉の 0102 から単弁 16 葉の 0103 と変化し、更にこの軒丸瓦が九重東岡廃寺に伝わって単弁 16 葉(小)を生み出す。更に、単弁 16 葉(小)は筑波郡中台廃寺、平沢官衙跡、茨城郡茨城廃寺跡、下佐谷廃寺跡、千葉県国分寺周辺遺跡などに分布するようになる。下総国分尼寺から出土したもの(1203)はこの簡便化したものである。

軒平瓦では、三重弧文(0201)、四重弧文(0202・0203・0204)、五重弧文(0205)、下野薬師寺の影響を受けた唐草文(0260)などがある。





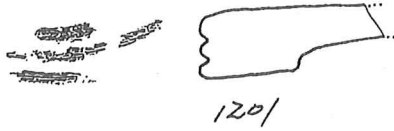
1101



1102



1150



1201



1260



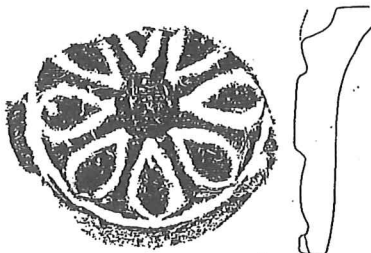
2101



2102



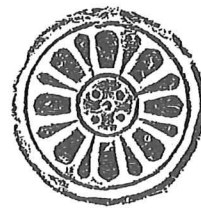
2103



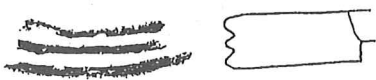
2104



2105



2106



2201



2230



鬼面文磨瓦



文様A

文様C



文様B

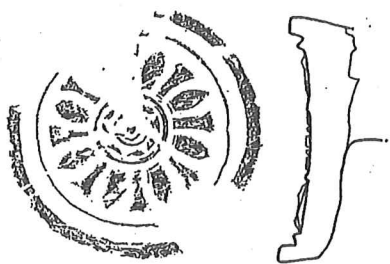


文様D

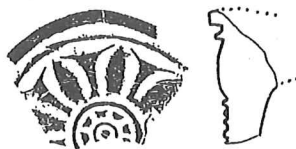


平瓦





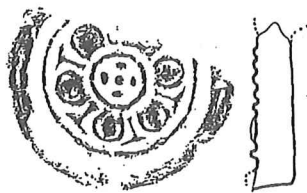
3106



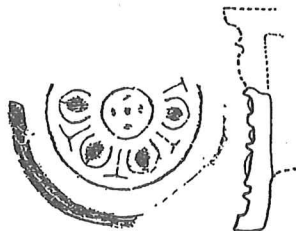
3126



3112



3114a



3114b



3121b



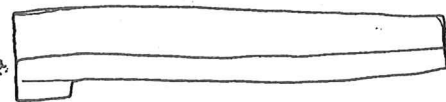
3122



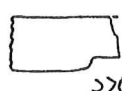
3113



3230



3250



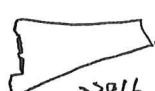
3251



3286



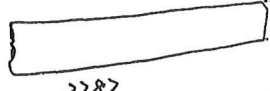
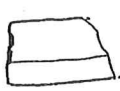
3281a



3281b



3282



3282

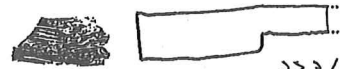
台渡里磨奇



3126

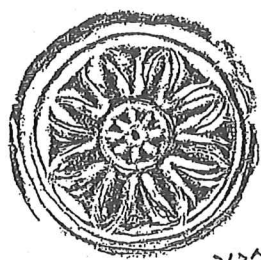


3120



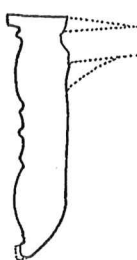
3231

原の寺氏磨奇



3127

下入野



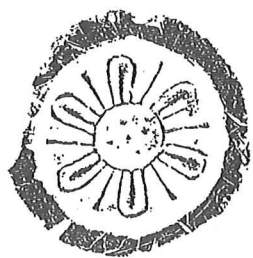
3121



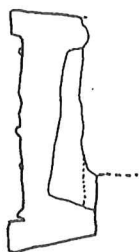
田谷磨奇



3290



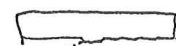
4101



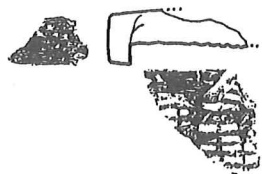
4102



4105



4201



4230

井上磨寺

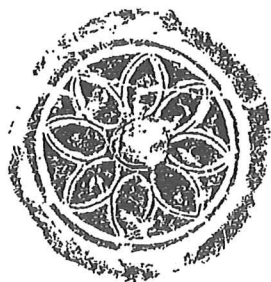


4105

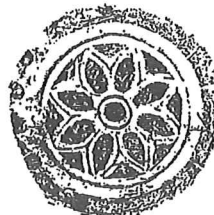


4260

手賀磨寺



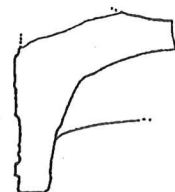
7101



7102a



7103



7104a



7105



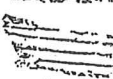
7106



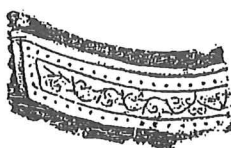
7230



7103



7201



72601

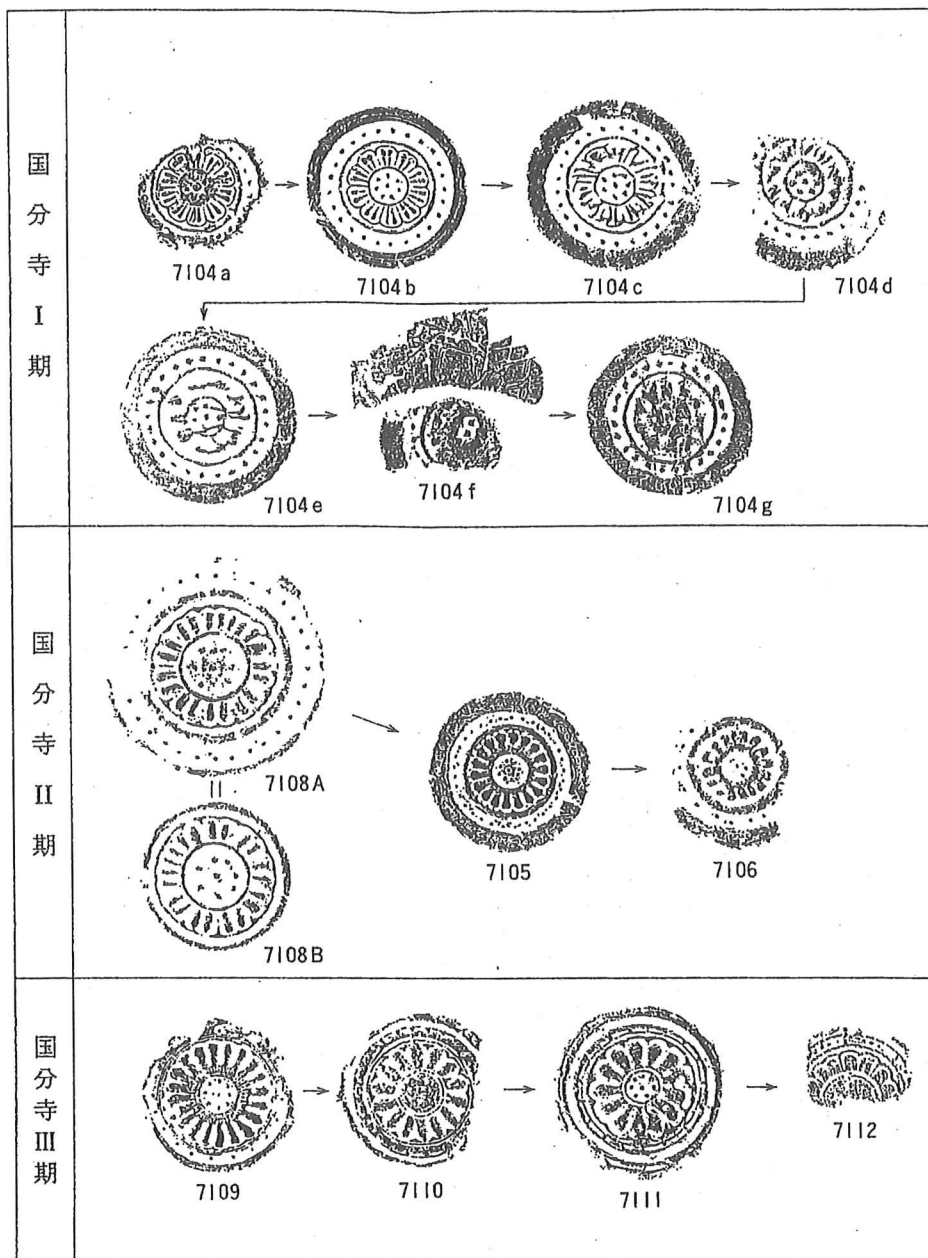
茨城磨寺



7201

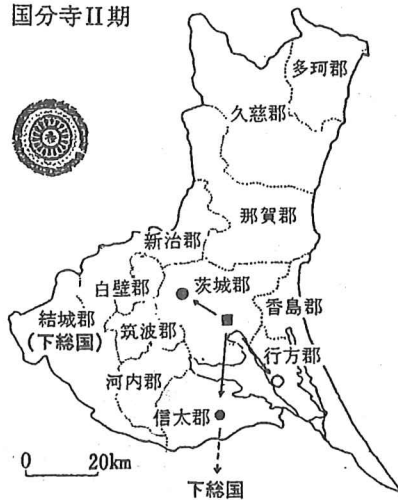


下佐谷磨寺

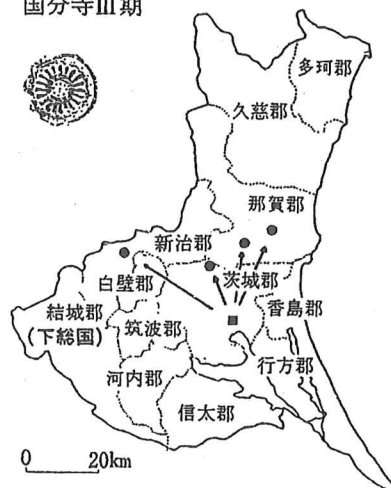


常陸国分寺軒丸瓦変遷図

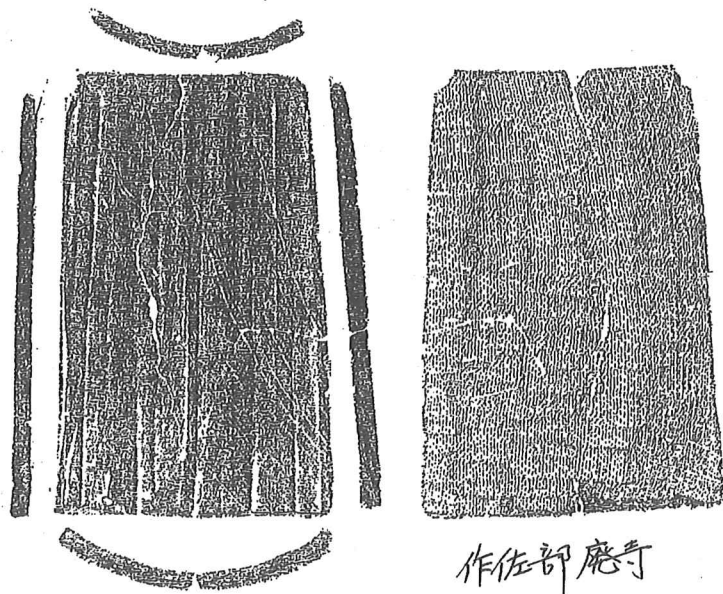
国分寺 II 期



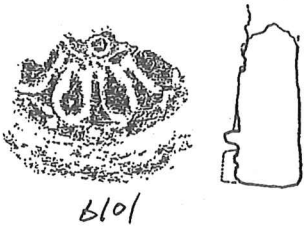
国分寺 III 期



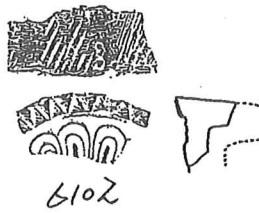
常陸国分寺軒丸瓦の動向



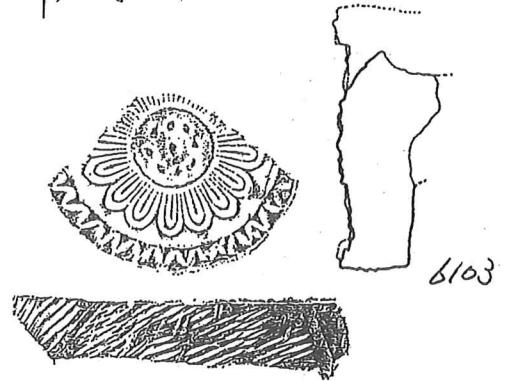
作佐郎磨奇



6101



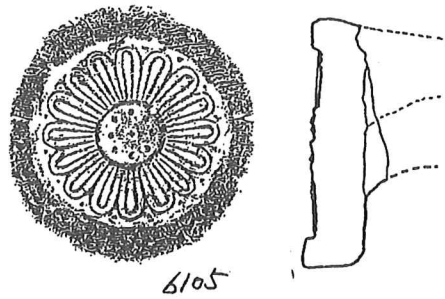
6102



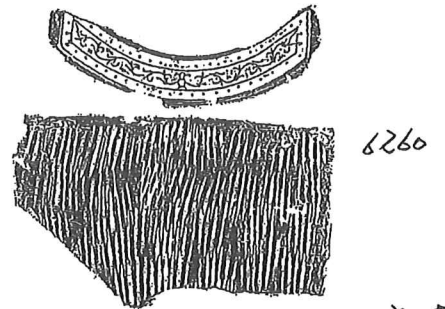
6103



6104

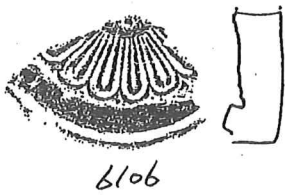


6105



6260

下谷其磨奇



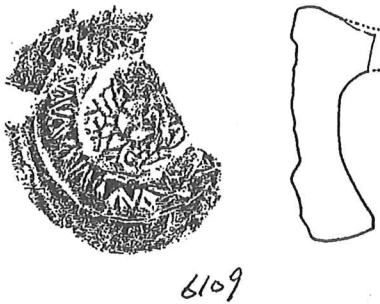
6106



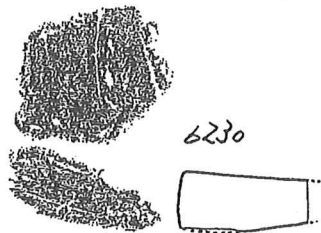
6107



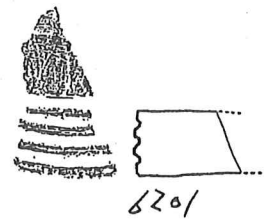
6108



6109

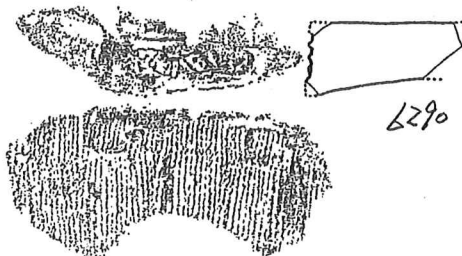


6230

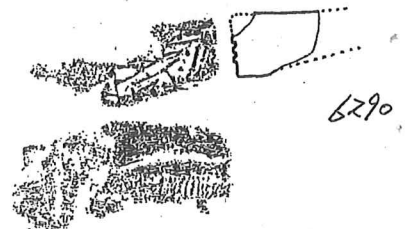


6201

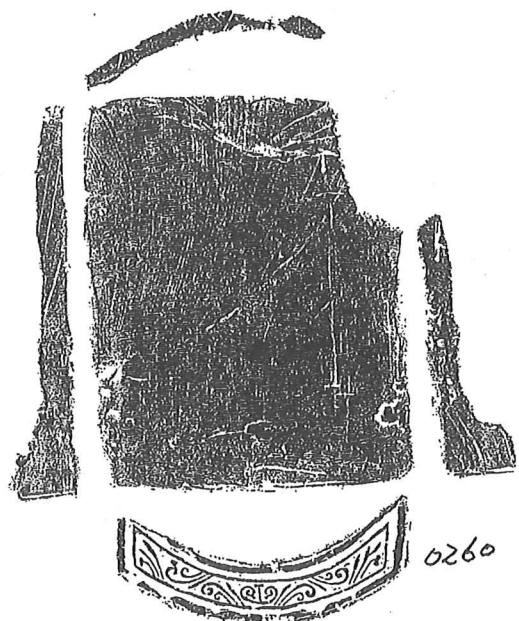
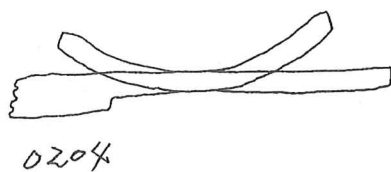
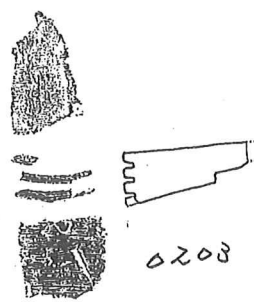
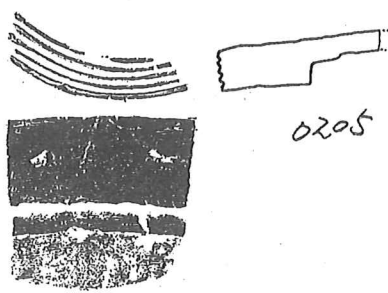
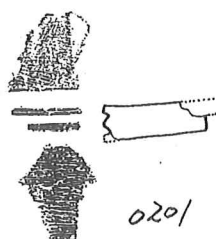
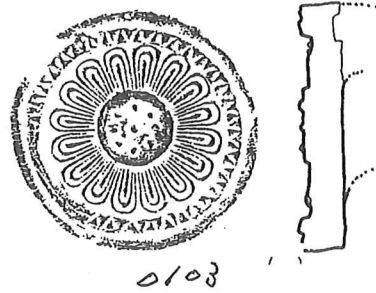
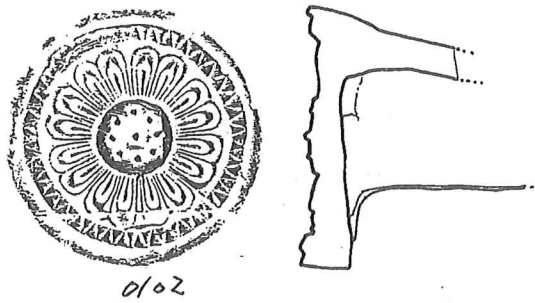
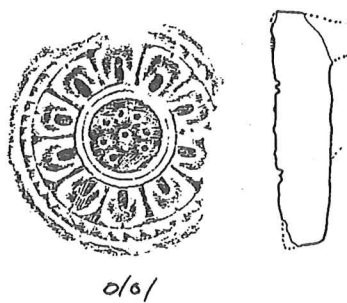
源法寺磨奇



6290



6290



結成磨子

